

正太の夢

赤田 則夫

正太はこたつに背を丸めて入りながら、本を読んでいた。夢中になって読んでいた。日本昔話集だった。黄色がかつた電燈の暗さも気にならなかつた。かえって薄暗い明りが、正太の心を、昔話の世界の中にいざなってくれるようだった。馬子と山姥の話だった。

「正太、寝なや」正太の反対側の炬燵に入つて、うつらうつらしていた老婆が目さまし声をかけた。

「うん」正太は生返事をしたが、顔は本から離さなかつた。

「おばばは先に寝るからもう」老婆はごそごそ起き出して、フスマを開け、隣りの真暗な凍るように寒い寝屋に入つていった。

「早く来るのじゃぞ」老婆は振り返り、口でポソポソ言い、フスマが閉められると、正太は一人になった。

「ああ」正太は、あいまいに返事をしながら本のページをめくつた。一寸こわかつたけれど、それよりも、もっと物語の世界の方向、正太の心を魅きつけた。

本当は正太は、おばあさんの傍に寝たくなかつた。おばあさんの体から、いろいろやかまどのすす臭さが凝縮されたような匂いがするからだ。正太にも、その匂いがするらしく、友達と遊ぶと、いつもそれを指摘されて、みなからいじめられた。小便くささも原因になつていた。今でも正太は寝小便をする。気を付けてもしてしまう。現実と夢の違いがまだ分らなかつた。直そうとしても、意志というものがなかつたし、まだ意識というものが幼かつた。だから正太は友達と遊ぶなくなつた。一人で本を読んで遊んでいた。そこには自分を仲間はずれにする人達がいなくなつたからだ。

明日(あした)はお正月であつた。でも正太には、ちつとも楽しいという実感がなかつた。明日はよそ行きの服が着れる、その服が目の前にあるという訳でもなかつたし、お母さんが目の前にいて「あしたの朝はお雑煮を食べるのよ」とニコニコと話しかけてくれる場面もなかつた。いつもとまったく同じであつた。正太は幼稚園にも行

かないから、正月休みという楽しみもない。大晦日といつても、まったく同じ夜であつた。おばあちゃんが「村の鎮守様に初詣りに行こう」と、ほけたような口でムニャムニャ言つたけれど、足腰の弱くなつたおばあちゃんに、それだけの歩行力があるのか疑問であつた。それに大晦日の日から、曇り空で、肌突き刺すような寒風が山から吹きおろして来て、ぐんぐん冷えこみ、夜には吹雪となつた。隙間風が冷たかつたけれど、正太は夜の更けるのも忘れ、日本昔話集を読みふけた。今、雪女の話だった。雪女が自分の生んだ子を忘れ兼ね、大雪の降り積もる夜、子供に会いに来る。子供は雪女の冷たさに死んでしまう恐い話だった。でも何故か、正太は少しも怖くなかつた。かえつてその子供がうらやましかつた。雪女でも彼を愛してくれる母親がいるからだ。

正太は母を知らない。正太の若い母親は、正太を生むと、すぐ子供を正太の父の母親である、おばあちゃんに預けて、行方をくらましてしまったからだ。一カ月後、正太の父親も、妻を探して行くつて出奔してしまつた。時たま父親から思い出したように、少しばかりの金を送られて来る。それだけであつた。だから正太は、自分の母親の顔も、父の親も一度も見事がない。写真もないから、全然その片隣も知らない。その為に正太は、母親というものを想像し

ようもなかったが、時たま無性に淋しくなる事があった。

正太が、入る前はとても憧れていた幼稚園を三日間行ってやめてしまったのは、他の子達には、その傍に若い華やいだ母親が付添っているのに、正太の傍には、唐草模様のもんぺをはいた、渋皮色の腰の曲った老婆がいたからだ。その対照は、まだ幼ない正太の目にも分った。それは他の園児や母親の好奇と侮蔑の、老婆と正太を見る目でも分った。正太はその対照の妙になるたけ気付くまい、忘れようと思うのに、その意地悪な目は執拗で、正太は現実の恐しさに震え上ってしまった。四日目の朝、通園の途中、鳥の中の道から、表通りに出ようとして、表通りを他の幼稚園児とママ達の一団が笑いさざめきながら通り過ぎるのが見えた時、突然、背筋をつらぬくような恐怖感に取りつかれ、表通りに出る事が出来なくなった。無性に母親が恋しく、傍にいる老婆が醜く憎らしかった。正太はワンワン泣きながら、又、煤くさい匂いのする家に戻って来た。老婆は唯おろおろするかなかった。正太はその日、高熱を發し寝こんでしまった。それ以来、正太は幼稚園に行かなかった。その代りといっているのか、正太は昔話集を讀みふけた。部厚い本だったけれど、一話一話珠玉のように面白く、お話の宝庫だった。山の中での話も多く、正太の家からでも、裏口からすぐ、

裏山が見えていた。山の話を読んだ後、裏山を見ると、今までと違った目で山が見えて楽しかった。しかし正太の家には本が少なかった。

正太の家から、百メートルばかり離れた所に、隣りの京子ちゃんの家があった。南に四坪ぐらゐの庭とも鳥ともつかない土地を前に、京子ちゃんの家は、ガラス窓に全面、明るい太陽の光りを反射して建っていた。泉庁のお役人の家で、朝いつも黒塗りの大きな乗用車が出迎えに来ていた。ある日、正太がその家の前を通ると、庭で京子ちゃんが一人で輪を回して石けりをしていた。正太は友達欲しさで庭に入りこんで京子ちゃんと遊んでいた。暗れた日だったが、風が冷たく、京子ちゃんが家に上ると、正太も一踏に上りこんだ。ガラス戸を閉め切ると、六尺幅の廊下は、サンルームのようになっいて、陽がかんかん照しこんで、冬の真最中だというのに暑い位だった。京子ちゃんは、甘いやさしい話し方をした。可愛い人形の刺しゅうをつけた白いブラウスを着、花模様の赤しぼい、ふわっと広がるスカートをはいていた。京子ちゃんが廊下から障子をへだてた自分の部屋に入っていくと正太も入った。本棚があった。正太が今迄、想像も出来なかつた程、立派な背の高い、本一杯つままった本棚だった。背表紙も赤、黄、青ときらびやかに輝いていた。部厚い極彩色の絵本も何冊も積み重ねてあ

った。正太は、その一冊をこわこわ取り頁をパラパラとめくっていた。

その部屋の左側に京子ちゃんのお姉さんもいて机に向っていた。入って来た正太に一べつをくれたが、あんまり関心がないように、机の上に置いた姫鏡台に向って、お下げの髪をすいていた。緑色のスカート、えんじ色のセーター、胸がふくらんだ少女であった。肌が京子ちゃんみたいに白く、すき透るように奇麗だった。正太は、おずおずと京子ちゃんの六畳間の部屋を見廻しながらお姉さんの事を気にしていた。お姉さんのいる部分だけが別個なものに見えた。そこだけが真珠のようなまろやかな光りに満ちていたからだ。スカートから出た、すんなりした素足、形良く伸びやかに動く手。そこに正太は、自分の想像している姉のような母を思った。この人が、私の母かも知れない。瞬間、正太はめくるめくように、姉のように年若い母親に抱かれていて自分を見つけた。幼稚園の時に会った他の園児の母達のように、自分の子だけに愛を感じ、注ぎこんでいる利己的な冷たさがなかった。しなやかな体をつつむセーターの感触のよう、この愛はまだ出口が見つからずに、彼女の心のまわりをおおい包んでいた。その愛が自分に向けられて来るような恐怖、喜びを正太は感じたのだ。その時、突然「この子どこの子？」と、かん高い声かして、エプロン姿の背の高い、かっぶくの

いい京子ちゃんの母親が現われたのだ。「ううん、知らないわ」鏡の中の自分の顔に見入りながら髪をといいた姉さんは、冷やかに正太を一べつし、もう全然興味も関心も失ったように、大義うに熱心に、髪をすくという自分の行為にふけていた。

正太は、姉さんや母親の自分に対する冷たさに肝をひやした。母親は色の白い上品な人だった。しかし、その目は意地悪く、汚ない物を見るように正太の一挙一投足に注がれた。顔をしかめ、舌打ちをした。「汚ない子ね、京子、どこの子なの？」「ううん、知らない」一緒に遊んでいた末娘は当惑したように母親を見上げた。「外で遊んでいたらついて来たの」「まあ」母親は益々顔をしかめた。「後ろの山の影の家の子じゃないかしら」姉が助け船を出した。「ほら、お母さんが他の男と墮落したとかいう、お父さんが後を追いかけて蒸発してしまっただとかいう」母親ははたと思いついたようであった。「京子、こんな子と遊んではいけません」母親は金切声を出し、正太の見ていた絵本を、正太の手から取り上げると急にやさしい声を出して言った。「さあ、坊や、家の人が心配していますよ、早く帰きなさいね」追い立てるように正太の後からついて来て、縁側から正太を出すと、ピシヤリとガラス戸を閉め切り、鍵さえかける音がした。正太は、とほとほと未練たらしく、自分の家とは全然違う、

瓦葺きの大きな家を振り返りながら、京子ちゃんちの家を離れた。それ切り京子ちゃんの家に行っていない。今でも正太は、京子ちゃんの母親の冷たい仕打ちを思い出すと、自分が生きてはいけないように、つくづく思い出すのであった。

夜が更けるにつれ、寒さは益々きびしくなってきたが、話に夢中になっている正太には、あまりそれに気が付かなかった。風が止み、しんとしているのは、深雪になったためであった。小さな山あいの里を埋めつくすかのように、雪は大きく重たく降りしきった。

正太は又、雪女の母親の話を読み返していた。自分の母も、こんな雪の夜更け、自分の事を不びんに思って帰って来てくれるかも知れない。その夢が正太を倅せにした。その時、バサッと木の枝から雪が落ちる音がして、雨戸かトントンとたたかれた。それは確かに人の手で雨戸がたたかれた音で、雪の重みでかじいだ木の枝が、雪を落し、雨戸に当たった音ではなかった。又戸がたたかれた。「お母ちゃんだ」瞬間的に正太そう思い、炬燵を飛び出すところけるように部屋と縁側との境の障子戸を開け、ひんやりした廊下に立ち雨戸を開けた。ブルブル体がふるえた。そこに女の人が立っていた。お高頭布をかぶり、顔は定かではなかったけれど、夜目にも白い、若い母親であった。

「お母ちゃん、お母ちゃんだね。やっばり来てくれたんだね。待っていたんだよ、きつと大晦日の夜、来てくれると思っていたんだ」正太は母の胸にむしゃぶりとついた。暖かいお乳の匂い。正太は母の手に抱きすくめられた。その手は冷たかったけれど、吹雪の夜、遠くからやって来てくれて、正太の体を抱いてくれたのだ。「お母ちゃん、お母ちゃん」正太は泣き叫び、しゃくり上げながら、母の体の奥深く入ろうと、もがくようにしがみついた。

翌朝、裏山の林の中で、体をのめりこむように深雪に埋もれて死んでいる正太の死体が発見された。その顔はまるで生きているかのように紅潮し、仕合せそうな微笑さえ浮べていた。この日、この辺は山影となつて陽はささなかつたが、空は晴れ上がって、すばらしい正月日和であった。明るいつ陽のさす山の斜面では、子供達がスキーをして遊んでいた。その歓声が、この薄寒い山の林の中の一角にまで響いてくるのだ。

